

氏 名	アブドラシティ ヤコブ 阿不都熱西提・亞庫甫
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論文博第 399 号
学位授与の日付	平成 12 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	Studies in Some Late Uighur Buddhist Texts Preserved in Russia (ロシア所蔵後期ウイグル語仏典の研究)
論文調査委員	(主 査) 教授 庄垣内正弘 教授 間野英二 教授 木田章義

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支所に保存されている古ウイグル語仏教文献を研究したものである。これらの文献は、言語特徴から見て、古ウイグル語仏教文献の中の「後期ウイグル語仏典」文献群に属するものであり、一部をのぞいて、これまで研究されたことのない文献である。これら文献の内容は、大乘仏典、小乗仏典、密教仏典、懺悔文、奥書などである。この中には韻文で書かれた仏典や、ブラーフミー文字を混入して書かれた、かなりウイグル化された「授記物語」なども含まれており、これらの文献の性格と背景を明らかにすることは、言語研究の面だけでなく、当時の中央アジアの仏教文化研究に大きな影響を与えるものである。

本論文は、これらの文献に関する文献学的研究を通して、古ウイグル語の性格とウイグル文化の在り方を明らかにしようとしたものである。

本論文は「序論」と2編8部から構成されている。

「序論」では本論文の対象となるウイグル語文献の性格について述べる。

まずウイグル語仏典の時代区分について論じ、いわゆる「古代チュルク語(突厥語と古ウイグル語)n方言」における非円唇狭母音の低母音化現象の有無によって、「初期ウイグル語仏典」と「後期ウイグル語仏典」とを分類できるという説の正当性と有効性を確認した。すなわち非円唇狭母音の低母音化が見られる文献は、ウイグルマニ教文献と、それに近い時代に書かれた「初期文献」であり、低母音化を起こしていないものは元朝時代に書かれた韻文文献などを含む「後期文献」とであると断定できることを確認した。一方、「初期ウイグル語仏典」中には、ソグド語を通じて借用されたサンスクリットの語彙が、トカラ語を通じた語彙と並んで現れることについても改めて指摘した。そして「初期ウイグル語仏典」の言語特徴の精確なリストを作成し、各文献との関係について詳しく論じた。

このリストと対照することによって、本論文に用いた資料は、すべて「後期ウイグル語」に属することが明らかになった。「後期ウイグル語仏典」を更に詳しく検討し、「元朝時代の仏典」と「元朝時代以前の仏典」とに二分した。この仏典分類に際して、これらの言語特徴以外に、文字形態や書記法、手書きか印刷か、などの「超言語的」(extralinguistic)特徴の有効性についても論じた。同時に、本論文の対象とした資料を中心に、ウイグル語仏典の時代と内容の関係についても論じた。

第1編は、Dishastvstik というウイグル語タイトルで知られた小乗仏典である。この文献はロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支所が所蔵する Krotkov コレクション中の、最も長いウイグル語仏典の一つであり、元来は冊子形式の文献であった。残された部分は総行数816行に上り、行数、内容、体裁だけではなく、ウイグル文中に、多くのサンスクリット来源の借用語を含んでいる点からも注目を集めてきた文献である。この仏典は発見されて間もない1910年に、W. Radloff と A. von Stael-Holstein らの手で研究された。その後も、この文献について若干の考察は提出されたが、ファクシミリが公開されていなかったため、Radloff らの提出したテキストそのものについて触れられることはなかった。本論

文では、この文献の完全な写真を入手したので、そのテキスト自体も詳しく検討することができた。

第1部では、Dishastvstik に関する先行研究について、先行研究の問題点を論じた。まず、この文献の年代に関するこれまでの意見を検討した。古代チュルク語 n 方言における i/i の低母音化の存在は「初期ウイグル語文献」の特徴であるが、この文献には、その特徴や、それに付随する初期ウイグル語の別の特徴も現れていない。また、この文献の言語には元朝時代のウイグル語仏典の言語特徴と言われる現象も表れていない。このことから、この文献が明らかに元朝以前の「後期ウイグル語仏典」に属するという結論に至った。さらに、各時代のウイグル語仏典の言語特徴と詳しく比較した結果、この文献が10世紀後期か11世紀初めに作られた可能性が高いという結論に達した。次に、この文献の内容と一致、あるいは類似する文献の調査を行った。これまで、ベルリンに蔵する2葉のサンスクリット仏典断片 (SHT 4376, SHT 4391) がこのウイグル語仏典の内容に類似するという情報はあったが、具体的にどの部分がどのように一致するのかは分からなかった。その一致する部分を突き止めた。特に、ベルリン蔵の断片は、内容や構成においても、本文献と一致し、本文献は、ベルリン蔵のサンスクリット断片と類似の内容をもつ翻訳原典からのウイグル語訳であろうと推定した。また漢文仏典の中から、「摩訶僧祇律卷第三十四」(T No. 1425, vol. 22, pp. 500c-501b) がこの文献の内容に近似していることも明らかにした。

本文献には、多くのサンスクリットからの借用語が含まれている。統計的には、サンスクリット来源の借用語は、語彙全体の33.4パーセントに至っている。これらがサンスクリットから直接導入されたものではなく、トカラ語形式を仲介していることはこれまでの研究で明らかにされている。ここではサンスクリット来源の借用語に対し、サンスクリットと並べて、出来るだけ多くのトカラ語仲介形式を提出した。なお、サンスクリットや漢文と対応する部分はウイグル文と対照させて提出した。

最後に、この仏典の文字表記と言語形態に注目して、歯茎破裂音表示文字 (t と d) の混用の現れがすでに始まっていること、また、名詞の対格表示は、主に -Ig / -Ug を用いており、後期文献の特徴のひとつである -nI は、若干の代名詞にかぎって現れることを指摘した。位格の方向格への代用や、第二人称複数代名詞 siz に代わる sizlAr の使用、第二人称複数所有接尾辞 -IngIzlAr / -UngUzlAr 使用の形で現れることなどは、翻訳原典言語の影響を受けた可能性のあることも論じた。

第2部は Dishastvstik の全文をラテン文字で転写し、続いて音素転写を行い、最後に英訳を付した。この中には Radloff が扱っていない、12葉240行も含められている。Radloff らのテキストは、ウイグル文字をウイグル文字活字に置き換えたものであり、現在の水準から見れば正確さに欠けるものである。本論文では、ラテン文字を用いて正確に転写し、これまでのものを大きく訂正した。内容においても Radloff らの多数の誤訳を訂正し、信頼できる新しいテキストに改めた。

第3部ではテキストの注釈を提出した。Radloff らのテキスト以降、集積されたウイグル学の知識を背景に、仏教用語等の語彙を中心にして、言語学的記述を行った。

第4部は、テキストに現れた全語彙をリストにした。語彙には英訳と文例とを添え、借用語については来源形式も示した。語彙リストを掲げるのも、本文献に関しては、初めての試みである。

第2編はこれまで公表されたことのないウイグル語仏典の64面の断片を研究対象としたものである。

第1部では、大乘仏典及び密教仏典断片の性格について論じた。

はじめに、「法華経」のウイグル語訳断片について論じた。「法華経」に属する断片は、各地にかなりの量が遺されているが、それらを漢文と対照することによって、四つのグループに分類し、それぞれのグループについて分析した。その結果、ウイグル語断片は、いずれも、漢文テキストを基礎において、ウイグルで改変されたものであることが明確になった。次に13葉の断片が「大乘無量壽宗要経」であると同定し、これらの断片の内容がベルリン、トルファン、京都などに保存されている8葉の断片と同種のものであることを明らかにした。そしてこれら全21葉を整理し、ウイグル語版「大乘無量壽宗要経」のかなり完全なテキストを復元した。このウイグル語仏典はこれまでチベット語からの翻訳と見なされてきたが、漢文仏典とも大体一致しているので、チベット語からの訳出とは断定できないと論じた。続いて、密教仏典と考えられる断片6葉について論じ、その内の2葉 (Kr. IV 391) が、中村不折氏所蔵断片 (ShogNakamura III) と共通点を持つことに注目し、文体の分析などを通して、両者が同一ウイグル語仏典からの書写である可能性が極めて高いと推定した。残りの4葉についても、漢文仏典との関係や特殊な丁数表示などについて論じた。その他、所属仏典は明らかにできなかったが、内容、

構造、用語から見ると、大乘經典と推定できる3葉6面の断片を分析し、断片Bには漢語借用語と推定できる形式がかなりの数現れていることを指摘し、その分析も行った。

第2部では説話的内容をもつ断片について論じた。これらは何れも完全に同定できるサンスクリット、あるいは漢文を見つけていない。最初に、裏面の漢文から同一テキストに所属すると推定できる6面を、漢文の文脈に従って整理し、検討したところ、それらの内容が「月光童子」に関するものであることが分かった。サンスクリットと漢文の、「月光童子」を主人公とする物語と比較してみたが、内容の一致はみられなかった。本断片の特徴を分析し、文字、言語の面からこの仏典が元朝時代に書かれたことを明らかにした。次に「波斯匿王」を主人公とする内容の断片を取りあげ、その内容の一部が「増壹阿含經」(T 125, vol. 2, 827)や「雜阿含經」(T 99, vol. 2, 305)と一致することについて述べた。また「仏説轉法輪經」(T 109, vol. 2, 503)に描かれた「轉法輪」に関するウイグル語断片を取り上げ、その内容が他のいくつかのウイグル語仏典のものと部分的な共通点をもつことについて議論し、この断片の内容と構成の特徴について述べた。最後に、「僧と婦女の物語」が書かれた断片について分析し、これに関連するウイグル語文献を指摘し、表記上の特徴や明確な口語的特色などを明らかにした。

第3部では、3葉の奥書、2葉の頭韻文、さらにブラーフミー文字表記を含む仏典断片について論じた。まず、奥書についてはその形式や内容、語彙の特徴などから、断片AとBが「懺悔文」の一種であることを推定し、さらにBはUigurica II 7やShogBeichtの奥書と同類のものであることを明らかにし、Uigurica II 7とShogBeichtを参考にして、断片Bの内容を再構することに成功した。頭韻詩で書かれた2葉については、これらがBTTXIIIに掲げられた韻文と関係することを述べ、BTTXIIIでは関連をもたないテキストとして処理された二つの頭韻詩断片を、この2葉を通して結合することができた。更に、これらとバリエーションを蔵するPelliot Ouigour 4521とが、部分的ではあるが一致していることを述べ、この断片も含めてテキスト全体の復元を試みた。また、このテキストが「法華經」に見られる「法明の賛美詩」(T 262, vol. 9, p. 28b)を参考に作られたことを明らかにし、北京大学所蔵の敦煌出土ウイグル断片(Fu C29V)も類似の懺悔文といえる頭韻詩であることも確認した。最後に、ブラーフミー文字の混用されたウイグル語断片4葉を検討した。混入されたブラーフミー文字部分は、実際には固有名詞と仏教用語のみに限られ、それらの幾つかにはウイグル文字によるウイグル語の接尾辞が付けられていることから、後期ウイグル語仏典によく見られる漢字の使用法と、このブラーフミー文字の使用法が同じ性格のものであることを明らかにした。この種のテキストにはしばしば頭韻詩を含み、しかも実在した人物名がqutlug urug-nung “神の祝福を受けた家族”などの表現とともに現れるので、後期ウイグル語仏典の一つである「授記文学(授記物語)」に当たるものであろうと推定した。

第2部では、「序論」の分類と第1部の分析を基礎にして、今まで研究されていない64ページのウイグル語断片を、内容にしたがって14テキストにまとめて提出することができた。この部分は、第2編全体の研究と分析に影響するだけでなく、将来、多くの研究者が利用すると予想されるので、信頼できるテキストと英訳を提供した。全テキストをラテン文字で文字転写し、音素転写と英訳を提供したうえで、対応する漢文テキストが確定できた部分については、その漢文仏典を、ウイグル語テキストに対照して掲げた。

第3部は、第2部で提出されたテキストの注釈を行った。テキストに現れた新しい語彙や文法上の問題についても解説した。既に知られた仏教用語に対しては、ウイグル語文献研究の最新成果と新しい資料を参考にして、より詳しく新しい解釈を下した。ウイグル語テキストには、理解し難いウイグル語仏教用語も多く、注釈ではこれらに対応する漢文仏典と対照した上で、できるだけ正確に説明することに注意を払っている。

第4部は語彙であり、第2部で作成したテキストに現れる全ての言葉と表現を、簡単な説明や分かりやすいコンテキストと共に提供し、利用の便を図った。借用語に対しては、起源的な形と仲介形式を付した。一部の表現に対しては、それに相当する漢文形も付して置いた。

論文審査の結果の要旨

中央アジア古語のひとつであるウイグル語の研究は今世紀初頭にはじまり、およそ1世紀を経たが、研究の主流はなおウイグル語文献の内容の解明とテキストの提出である。この期間中に、ドイツ、イギリス、フランスなどのヨーロッパ各国あ

るいは日本に将来されたウイグル語文献の大半は研究が進み、テキストや文法記述が提出された。しかし、ロシア所蔵の文献だけは例外で、W. Radloff の後を継いだ S. Malov の研究が今世紀半ばに終了した後は大きな成果をみることがなかった。だが、90年代に入って旧ソ連体制の崩壊後、所蔵文献の外国人による研究も可能となった。

論者はロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支所の所有するウイグル語文献を扱って本論文を完成した。論文は「序論」と2編8部から構成されている。

「序論」においては主にウイグル語文献の時代区分について解説した。ウイグル語文献の時代区分の方法についてはこれまでいろいろ議論されてきたが、論者は、非円唇狭母音が語幹の第2音節母音と結合母音の位置にあつて低母音化する現象(i/iのo化)が初期文献に限って現れるという説を取り上げ、これが如何に有効な時代区分の基準となりうるかを、ウイグル文献全般を通して考察し、多数の例を掲げて実証した。さらに、論者の扱ったロシア所蔵文献がこの基準の適用により、すべて後期の時代に書かれたものであることを明らかにした。一方でサンスクリット来源語彙がソグド語色を帯びているか否かによる時代区分法についても言及し、これが上記の低母音化現象と平行することについても論じた。

第1編では、Dishastvstik を扱っている。この文献はロシア所蔵のいわゆる「クロトコフ収集品」中の最長のものであり、1910年に W. Radloff と A. von Stael-Holstein によってテキストが提出された。しかし、ファクシミリが付されていなかったため、その後テキストの改訂は行われなかった。論者は入手した複製写真をもとにテキストの全面的な読み直しを試み、誤りの訂正と新解釈を施した。また、Radloff らの扱い得なかった12葉240行も新たにテキストとして付け加えた。

論者は、第1編の第1部でこの文献に解説を施し、第2～4部でテキスト、英訳、注釈、語彙を提出している。Dishastvstik の翻訳原典はいまだ見つかっておらず、ただ複数のサンスクリット仏典が部分的に対応することのみが知られている。論者はそれらサンスクリットとの対照箇所を整理し、ウイグル文との対応の仕方について論じ、さらに漢訳の「摩訶僧祇律」の卷三十四の内容の一部がウイグル文と対応することを指摘した。「摩訶僧祇律」との対応は300行に及び、且つ正確に対応しているので、ウイグル文の構成法を知るだけでなく内容把握や語彙の決定に極めて有効である。Dishastvstik はウイグル語あるいはウイグル文献研究にとって重要な資料となりうるにも拘わらず、これまで不明部分を多く抱えた扱いにくい文献であった。だが、論者の提出した正確なテキストと詳細な解説は、ウイグル学に大きく貢献し、新たな研究を進めてゆく基盤を作ったといえる。

第2編で、論者は未公開であった断片64面を扱った。本編は「内容の解説」「テキスト」「注釈」「語彙」の4部から構成されている。

第1部はさらに3章から構成され、まず第1章では、「法華経」の内容に合致する断片について論じた。ウイグル語文献中「法華経」に属する断片の研究はかなりの数がみられるが、論者はこれまでに提出されたテキストをも含めてウイグル文「法華経」全般について論じた。そして、ウイグル文「法華経」が内容の構成法から4種に分類できること、その4種はいずれも漢訳からのウイグル語訳であり、構成の違いはウイグル側で行われたこと、などを解明した。

次に13葉の断片内容が「大乘無量壽宗要経」であることを同定した。そして、これら13葉がベルリン、トルファン、京都などに保存されている8葉の断片と同一種の文献であることを明らかにし、全21葉を整理して、「大乘無量壽宗要経」ウイグル語訳のほぼ完全に近いテキストの復元に成功した。またこれまでウイグル文「大乘無量壽宗要経」はチベット語からの翻訳と云われてきたが、漢文仏典ともよく対応するので、必ずしもチベット語からの訳出とは断定できないと述べた点は注目に値する。

次に密教仏典の内容をもつ断片6葉について、内容や、漢語からの借用語に関して分析した。その内の2葉が、中村不折氏旧蔵の1断片と多くの共通点を持つことに着目し、文体の特徴と内容から、これらが同一文献から書写された可能性について言及した。不折氏旧蔵の断片が孤立した存在であっただけに価値のある記述といえる。

第2章では説話的内容の断片について論じた。何れも一致する内容を他言語仏典に見つけ得なかったが、そのうちの6葉は裏面に書かれた漢文から、もともと一つの文献が分かれたものであることが分かった。これらを裏面漢文の文脈に従って順序立てたところ、表面のウイグル文の内容が「月光童子」に関するものであることが明確になった。「月光童子」を主人公とする説話のサンスクリットや漢文仏典と対照してみたが、ウイグル文との内容の一致はみられなかった。次に「波斯匿王」の物語に関する断片を取り上げ、その内容の一部が「増壹阿含経」や「雜阿含経」と一致することを明らかにした。

そのほか「転法輪」に関するものや「僧と婦人の物語」などを取り上げ、他のウイグル語仏典の中にそれらと類似する内容をもつものが存在することを指摘した。

第3章では、奥書、頭韻文、ブラーフミー文字表記を含む断片類について論じた。まず、奥書の2断片が「懺悔文」の一種であるとし、さらにそのひとつはベルリン収集の「Uigurica II 7」や中村不折氏旧蔵の「ShogBeicht」の奥書と同種のものであることを突きとめ、これらを参考にして、内容の再構成に成功した。

次に頭韻詩で書かれた1葉が「BTT XIII」で扱われたベルリン収集の韻文断片2葉と一連のものであることについて論じた。ちなみにベルリン収集のこの2葉はこれまで無関係の断片として扱われてきた。さらに論者はこれら3葉がパリ所蔵の「Pelliot Ouigour 4521」と部分的に一致することについても言及し、テキスト全体の復元を行った。また、復元テキストが「法華経」にみられる「法明の賛美詩」(T 262, vol. 9, p. 28b)を参考に作成されたことを明確にした。また、北京大学所蔵のウイグル語断片(Fu C29V)もこれと類似する内容を持つことを指摘した。

次に、ブラーフミー文字表記を含むウイグル語断片4葉について論じた。ブラーフミー文字表記は固有名詞と仏教用語に限られること、またウイグル文字によるウイグル語接尾辞を付加したブラーフミー表記の存在をも明らかにした。そしてこのウイグル語接尾辞の付加は、後期ウイグル語仏典に現れる漢字にウイグル語接尾辞を付加する方法と通じ合うことについて論じた。また、この断片4葉の内容が後期ウイグル語仏典のひとつのジャンルである「授記文学(授記物語)」に当たるものと推定した。

第2部では、第1部で解説した64ページのウイグル語断片を、その内容から14種に分類して、ラテン文字による文字転写と音素転写とを掲げ、英訳を付した。第3部ではテキストの注釈を行い、第4部では語彙のリストを掲げた。

論者は、ウイグル語あるいはウイグル語文献に関するこれまでのウイグル学の研究成果を熟知しており、論者の記述に先行研究の見落としはほとんど無い。しかし、漢語や仏教学に関わる知識に不十分な点が多々みられ、とりわけテキストの内容把握や注釈に誤謬や不足が少なくない。この欠陥はドイツ人研究者を中心として発展してきた分野そのものの欠陥でもあるが、論者はそれを避ける努力をするべきであった。しかし、このような欠陥を有するにも拘わらず、英文450ページからなるこの論文の内容を、現在のウイグル学の水準を遙かに超越したものであると断言して誤りはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2000年8月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問した結果、合格と認めた。